

ハイデルベルク信仰問答講解説教 18 「天につなぐ命」(2012年1月1日 礼拝説教)

【聖書箇所】

ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。とある場所に來たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」(創世記28:10-17)

父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。(ヨハネ17:24)

【説教】

主の年2012年を迎えました。この年も救い主イエス・キリストを与えられた全能の神さまからの恵みと祝福が皆さん一人お一人の上に、そしてこの世界のすべての人々の上にありますように。特に困難にある人々が生きる希望を見出すことができますように心からお祈りいたします。

昨年は、大きな試練の年でありました。東日本大震災を始め、多くの自然災害にこの国は見舞われました。原発事故による放射能の汚染は今も深刻な事態にあります。世界に目を向けてみれば経済危機の状況が続いています。また個々の生活においてもそれぞれに様々な困難な状況を抱えております。見通しがきかない。先行きが分からないことは大きな不安であります。不安の闇がわたしたちを覆い尽くすようでありました。

そういう中で、わたしたちが思うことは、神さまは今どこにおられるのかということです。このような状況を放置しておられるならば、もう神さまはおられないのではないかと。またおられたとしても、どこか遠くに、わたしたちとはかけ離れた世界におられるのかもしれない。そのように考えることもあるでしょう。

今、わたしたちはハイデルベルク信仰問答を読んでいます。昨年の8月から読み始めました。このハイデルベルク信仰問答の一つの大きな特徴、それは「慰め」であります。信仰問答はこのような問答で始まります。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることですか。」この「キリストのもの」というのは、キリストに属している、その一部分になっている、そう理解して構いません。そこにただ一つの慰めがある。「一つの」というのは、「唯一の」ということです。本当の慰めはこれだ。これ以外に慰めを求めても、それは嘘、偽りでしかない。本当の慰めは、わたしがキリストのものであることだけだ。もしわたしたちがそのことを本当に信じられたのなら、今のこの試練の中にあっても、なお信仰を保ち、希望をもって生きていけると信じます。わたしたちが信じていることは、本来そういう力をもっている。しかし残念なことに、宝の持ち腐れとか、まだまだ信仰の域に達していないまま、何か気分的なものに留まっているということになっている。それはもったいないことです。今こそ、この信仰問答から信仰本来の持つ本物の慰めを取り戻す必要があります。この講解説教がそのような信仰を取り戻す機会となれば幸いです。

さて、今日は第18主日、問46-49の部分を読みました。前回の第17主日、ここは復活についての問答でありましたが、

これがただ1問だけで成り立っていたことを考えますと、この第18主日、これはキリストの昇天について扱う問答ですが、これが4つの問答を用いているというのは、いさかかバランスが悪いと捉えられても仕方がないかもしれません。今日は皆さんここを読むだけでも大変だったでしょう。特に慣れない方は、なぜこのような難解な文章を読ませるのかと疑問を抱かれたかもしれません。なぜこのキリストの昇天ということに信仰問答はこのように言葉を重ねているのでしょうか。

わたくしがこの信仰問答と向かい合ってきたとき、全部で129問ある問答の中でも、今日の第18主日、特に問49が実はとても大事な部分であると感じています。つまりここがなかったら、この信仰問答全体の魅力が落ちると言ってもいい。もちろん最初の第1問も重要ですし、またキリストの三職を言い表した問31、32も大事ですが、それらはこの問49があって初めて見えてくるものではないかと思う。キリストの昇天ということ。これのどこが大事なのか。それよりも十字架と復活ではないか。皆さんそう思われるでしょう。でも今、キリストはどこにおられるのか。使徒行伝では「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と告白する。そのことが実はわたしたちの今の生き方を決める。十字架も復活もそれは過去の出来事です。しかしそれが現在のこととして、しかもこのわたしの身に起こるためには、キリストの昇天が必要なのです。

日本の教会の優れた指導者であった植村正久牧師は、受洗志願者の試問会でこうよく尋ねられたそうです。「あなたは今、イエス・キリストがどこにおられると思えますか」と。この質問とよく似た説教をわたくしは神学生時代に訓練を受けた東京の自由が丘教会で聴きました。元自由が丘教会の牧師であって、もうすでに天に召されましたが小平尚道牧師がこのように言われた。「キリストは今どこにおられるのか。十字架の上か。カトリック教会は十字架にはりつけのままのキリストを礼拝堂に掲げているが、あれは間違っている。我々は復活して天に挙げられたキリストを礼拝しているのだ」この言葉は今も印象深くわたしの耳に残っています。

キリストは今、どこにおられるのか。十字架の上ではない。それは過去のこと。やがて来られる。それは将来のことです。では今どこにおられるのか。キリストは昇天され天におられるのです。そしてそのことが今のわたしに関係がある。今キリストがおられるところは、現在のわたしたちの生き方に深く関わっていることなのです。だからこそ信仰問答は言葉を重ねてこの昇天を説くのです。

これまで昇天といっても、あまり関心をもって来なかったの

ではないでしょうか。ただ漠然と天に昇って行った。あるいはわたしたちが世を去ることになぞらえたり、キリストは神の子だから、当然、神さまのところに帰った、というような漠然とした考え方に留まっていた。でもそれでは不十分なのです。なぜキリストは天に昇られたのか。

先週はクリスマスでした。クリスマスは真の神さまが真の人間となられた出来事です。これを教理の言葉で「受肉」と言います。文字通り、神さまがわたしたちと同じ肉体をその身に受けられた。それは仮の姿ではありません。本当に人間となられ、人間して生活され、そして人間として十字架におかかりになられ、人間として死なれたのです。それが主イエスの生涯です。そしてその肉体をもって復活された。「空の墓」はその体のよみがえりを示しています。

それから天に昇られる。使徒言行録の第1章に昇天の記事があります。そこには「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」(1:9)とあります。「上げられた」という言葉は原文では具体的に手で引き上げるという言葉です。ですから霊のような存在になって、ゆらゆらと昇って行くのではない。わたしたちと同じ肉体をもって天に引き上げられたのです。問46でわざわざ「キリストが弟子たちの目の前で地上から天に上げられ」としているのは、そのようにその昇天が体を伴っていたことを表しています。つまり主イエスの受肉から始まった御業は昇天まで終始、体を伴っている。このわたしたちの体をもって生まれ、生活し、死に、葬られ、復活し、昇天された。それはこの体を持つ人間を救うためです。わたしたちの存在のすべてを御自身の内に抱え込んで、そして罪の体を十字架で滅ぼし、復活して新しい命に生かし、その体をもって天に昇られる。

ここで注意していただきたいのは「天」は神さまの御支配のことです。体をもって昇天されるということは、わたしたちの体、存在を神さまの御支配につなげてくださったということなのです。そのことを問49は独特な表現で表します。「わたしたちがその肉体を天において持っている」わたしたちの体の一部が天にあるというのです。更にこう言う。「頭であるキリストがこの方の一部であるわたしたちを御自身のもとにまで引き上げてくださる一つの確かな保証である」と。わたしたちは洗礼を受けて、この方、キリストのすでに一部になっている。キリストが天に昇られたことによって、わたしたちの体の一部が天にまで届いた。もちろんわたしたちは地上におりますが、キリストの昇天によってこの地上と天上はつながったのです。キリストの昇天がそのことを可能にした。そこにキリストの仲保者として役割があるのです。天と地をつなげたのです。

本来、わたしたちは罪ゆえに、天、神さまの御支配から離れたものでありました。でもこのわたしたちの罪を赦し、天に結びつけるためにキリストは十字架で死に、復活され、そして昇天された。体をもって昇天されたのは、わたしたちを連れ立てて昇天されたということです。わたしたちをおいて一人で行かれたのではない。この存在を天につないでくださった。それが昇天の本当の意味なのです。そこが分からないと、わたしたちは、自分は天とは無関係のもののように考えるでしょう。でもわたしたちはすでに天とつながって生きています。洗礼を受けて、キリストと結ばれたわたしたちは、キリストの一部として天とのつながりをもって生きています。少し悪い表現に「棺桶に片足を突っ込んでいる」というのがありますが、わたしたち信仰者は天に片足を突っ込んでいると言ってもいいかもしれません。

それがわたしたちの慰めであり、希望なのです。この罪の世にあって、どんなに深く罪の闇が支配しようとも、多くの困難があつて、悲しみがあつて挫折してしまいうようになって、洗礼を受けキリストに結ばれたわたしたちは、すでに主イエスと共に天につながっていると信じることができる。そしてやがて来るべき日には、主イエスがこのわたしの全存在を完全なる神さまの御支配に引き上げてくださる。そのためにキリストは先

に天に昇られ、わたしたちの弁護者となられ、保証となられ、またこの地上でもわたしたちが意気消沈してしまわないように、御自身の聖霊を送り、そこからわたしたちを励ましてくださるのです。

さて、先ほど、「キリストは今どこにおられるのか」という問いをいたしました。天に昇られたのであれば、今、キリストは天にあって、地上を生きるわたしたちとは別のところにおられるという理解が起こるかもしれません。そうになると、マタイによる福音書の最後で主イエスが弟子たちと約束をされた。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:20)この約束は破棄されたことになるのか。そういう問いの立て方をしているのが問47-48です。

この部分は、当時の教会のある論争が背景にあります。それをここで詳しくお話しする暇はありません。実は、宗教改革後にプロテスタント教会はルター派と改革派に分かれるのですが、その論争がこの問答の背景にあります。それは一言で言えば、キリストがどのような形でわたしたちと共におられるかというものでした。ルター派は、それこそキリストは地上のどこにでもいるという理解をした。だから聖餐のパンと杯の中にもキリストは存在するというのです。そうでなければ共にいてくださるようには思えない。「共におられる」というのが、極めて人間的な感覚なのです。

しかし改革派はそうは捉えません。そういう見える仕方でもキリストは共におられるということではない。共におられるのは、神性の働くところ、どこでも。体はわたしたちの感覚で共にいてくださるわけではない。神さまはわたしたち人間の感覚を越えて、御自身の神性、威厳、恵恩、霊において片時もわたしたちから離れていない。これは理解というより信仰の領域なのです。ルター派はまだ理解の領域で「共におられる」ということを説明しようとしている。でも神さまが共におられるというのは極めて信仰的な事柄です。

今日、読みましたヨハネによる福音書第17章24節。主イエスが父なる神さまに願っています。「わたしに与えてくださった人々を、わたしのいるところに、共におらせてください」キリストのいるところ、それはそういう特定の場所を考えているのでしょうか。そうではない。キリストに結ばれているわたしたちそのものがすでにキリストのいるところとなる。キリストの栄光を現すところとなっている。この存在が罪赦されてそういうところとされたのです。

ルカによる福音書に「実に神の国はあなたがたの間にあるのだ」と主イエスがお答えになられたところがあります。また「二人、また三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18:20)と言われた。天、神さまの御支配は遠いところではない。その神性の及ぶところ、そこは天となり、キリストはそこに共におられるのです。それがたとえこの罪の闇の世であっても、そこにも神さまは天を現してください。この礼拝もそうです。どうかこの天のつながりを感じていただきたい。それが試練の中でもわたしたちを慰め、この年を生きる力になるのです。お祈りをいたします。